いの流水俳壇

松尾　満津於　選

「当季雑詠」

点滴のきらりと空の小六月　友草　水月

（評）作者は先頃入院中と聞いて、何かと気がかりであったが、この句を見る限りではあまり心配はなさそうに思える、点滴の釣り下げられた薬袋が空になって、窓に射し込む光にキラリと光った、折から初冬の小春日和、間もなく退院できる日が来るだろう。「小六月」という季語の働きが入院という暗くて重い気持ちを、明るい安らぎに変えている。

まあこんなもんか人生にごり酒　間　浩太

（評）麹に水を加えて醸造しただけで、滓を取らないままの白色でどろりとしたものが、にごり酒である。清酒はこの過程から更に精製されるが、造作次第で甘くも、酸っぱくもなる。この句は酒に例えて人生を達観している。平易にすらりと纏めているが、決して茶化したり投げ遣りな句ではないように思う。

着ぶくれて索引覗く虫めがね　刈谷　志津

（評）退院後間もない日常であると聞いていたが、何事にも熱心な人であるだけに、早々と作句等の事を考えているのであろう、辞典の小さな字を拾いながら語彙を確かめている。直接出会った感覚からは、まだ虫めがねの必要はない年令のように思えたが、矢張り年は齢ということであろうか。それにしてもこの句に出てくる厚着の風体。飾らないところに好感がもてる。

ひとり言多くなる日や石蕗の花　中野　好子

（評）石蕗は晩秋の頃から初冬にかけて、いち日いち日と日短になる季節に、黄金色の花を咲かせる。ひそかな石蕗の黄色い花が、ものいいたげに問いかけてくる。この作品はどこか住み馴れた安らぎが感じられる句。

銀杏散る大樹に一葉残さざる　川村　博子

無精髭のはみ出ておりぬ頬被り　竹崎　光子

吹く風が人の背を押す十二月　大川節弥

大霜やひるはなごびてぬくかろう　渡辺　万利子

旅行への夢も果たさず十二月　川村　千図子

木ノ実降る歩けば楽し独言　片岡　包女

生返事していて毛糸編みつづけ　岡本　とも子

木枯らしや行列長しジャンボくじ　小島　良

寄せ鍋にほくほく鼻も赤らみぬ　吉良　芙美

古里の地名出てこずしぐれけり　川上　こよね

太鼓打つ乙女は素足冬うらら　津田　久美

丸き背も母似と笑い日向ぼこ　森元　二美子

寒灯す旧家の土間や和紙の花　松岡　きよ子

老遍路裸木の中見えかくれ　楠目　哲郎

みかん島繋ぐしまなみ橋いくつ　筒井　眉躬

顔見せや樟脳匂ふ帯結ぶ　伊藤　たみ

高山の西陽僅かに寒厳し　川村　愛

柚子風呂に浸りて年の惜しまるる　筒井　文

初雪に計画変わる農事かな　藤田　里野

見はるかす初冠雪や阿波境　弘瀬　うき子

医師の灯の消えし山里寒昴　松尾　満津於

次題　「当季雑詠」　五句

締切　毎月十五日

投句先

吾北教育事務所

上八川甲2010

☎867―2133

第2回 いの町新春マラソン大会

1月9日（月）、第2回いの町新春マラソン大会（平成18年体育始め）が開催されました。

当日は天候にも恵まれ、様々な年齢層の選手67名が参加しました。

参加者は吾北中央公民館から2km、3kmの部門に分かれ、自分の思い思いのペースで軽快に完走しました。